

と遂に彼の罪を鳴らして起つものさへ出るに至つた。彼はこの變を聞いて、直ちに馳せて大阪に至つたが、勢今や如何ともしがたい状況を直覺した。そして運命の下に死を覺悟したのであつた。

しかし其のときである。チラと電光の如く、瞬間に彼の心を掠めて通つた幻があつた。

「清風翁の幻である。」

それは政之助にとつて、南船北馬匆忙の中、何等かの心の底に靜まつてゐた、防長再興の恩人の姿であつた。と

「公のお使だ。」

といふ聲がしたかと思ふと、政之助に對して、「早まることな

きやう」との有難い御掟の到達であつた。彼は全く感泣してしまつた。

それからの政之助は、専ら君冤を雪ぎ、朝眷を回復することをして、その任とし、畫策大いに苦しんだものである。彼が下獄中の高杉晋作を訪ねて、罪を得たのも、起つて岩國の吉川經幹に善後策を談じこんだのも、その爲であつた。

しかし一方俗論黨の猖獗は、次第に盛になつて来るばかりで、政之助は天を仰いで嘆息し、自分の任重くして、力の足らざるを悔いた。そして遂に

絶食！ 自刃！

といふ最後の途を選んだ。時に年四十二才。彼が其の鬼と

化する前、肺腑を絞つて、其の子に忠孝の大節を訓へた言葉、

「汝我が屍を孔道の傍に埋めよ。」

幕兵もし來り侵さば

吾これを叱咤して退けん。」

と。あゝこの言葉こそは、當時の防長の志士を代表する、最も尊くも勇ましい言葉であつた。不朽の忠魂、今尙、思はず惰夫をして起たしめるものがあるではないか。

おゝ尊きかな。大歳村南矢原の犠牲！後特旨を以て正四位を贈られ、今は永久にこれを記念するための貞珉が此處に建てられてゐる。そして四圍の物象、一種の象徴感に輝いてゐる。

測り知れない空間に、

生命の觸手を伸べて萌え上る。

草よ。木よ。

その向ふにも萌えさかる生命の冠、

横溢する森よ。

そして尙奇縁ともいふべきは、清風の命日が廿六日であるが、政之助も亦廿六日が忌日であることである。

一五、餘榮

ちゝばる

ちゝばる

ちいちばる

.....

三隅山莊のほとり、春天の下、眼に痛いほどの日光が、キラキラしてゐる中を、一羽の告天子が、真直に中空さして、急使のやうに駆上り、又下りつゝ、何物かを暗示してゐた。

時は明治二十四年四月八日のことである。畏くも明治大帝より、清風多年の勤王報國を感賞し給ひて、

贈 正四位

の御沙汰を下し給ふたのであつた。又これより先、明治十六年同じく聖帝より、金千圓の御下賜の御事もあつた。一門の人々の喜びはもとより、かつて長藩の松平定信として、又松陰

以前の松陰として、其の功防長に大なりし清風のことゝて、心ある二州の人々の喜びも亦大なるものがあつた。

清風以て瞑すべし、聖恩まことに枯骨に及び、死して尙餘榮ありとは、全くかうしたことを言ふのであらう。

又直接間接に彼の遺志をうけついで活動した竹内勝康、周布政之助も、共に明治二十四年に正四位を、又嗣子唯雪も、明治四十五年二月に従四位を追贈されるに至つたことを思ひ合はせると、いづれも國事王事の爲めに、櫻の如く散つて行つた人々として、餘榮永久に香しいものがあるといはねばならぬ。

餘 榮  
其他、當時の尊聖堂に教へを受けたもので、教育界をはじめ、

種々の方面に活躍して、地方開発のために、それごとく盡してきた人も澤山あつて、今に其の功を謳はれてゐる。

直接、尊聖堂に入つて學んだわけではなかつたが、かの一代の教育家吉田松陰に、彼の思想が影響してゐるのは、最も尊い史家の興味でなければならぬ。

思ふに松陰及びその門下生は、防長及び回天思想の繼承者であつて、決して開拓者ではない。松陰を研究したのみでは、防長を完全に理解することは出来ぬ。況や維新の源流を探究し盡したとはいへぬ。たしかに松陰以前に、松陰を生んだ防長があつたのである。これぞ村田清風その人の存在であつた。

清風には、その主義思想などをうかゞふべき遺著も、かなり多い。

海防糸口

病翁宇波言

漁翁若話

漁翁寢言

辛丑政制建議

榮  
餘  
等々、實に大小三十餘種に上るのである。しかし、清風は遺著又は主義などといふよりも、寧ろ近代防長の基礎をうみ、實體を作り上げた、事功派の人としてみるべき面影が濃い。かうして兎も角、維新史上に於ける清風の地位は、隠れたる偉大な

存在であつた。あゝそれは恰も城廓の石垣にみる、水面以下の礎石にも比し得られようか。

こゝに於てか、かの松下村塾を訪ねるものは、一度は必ずや山紫水明の境、澤江に於ける、三隅山莊に、清風の遺蹟を探らねばならない。

こゝの小丘に立つて、

廻りや七里の青海の島よ。

島の名所は大門口

若い船頭さんの瞳色

アツと乗出しや日本海。

.....

とどこまでも男性的な船歌を、廣重の繪にみるやうな、紺碧の海に聞きながら、かの由緒深い清風松を仰いだだけでも、そろに昔歐陽修が、

「如何ぞ金石の質にあらずして、草木と其の榮を争はんと欲する。」

といつた秋聲の賦を思ひ出して、感慨の深いものがある。人生五十年と知らば、その五十年の間に、男子須らく心を千百年の遠きに馳せ、永久に亘つて朽ちない、有知無知の業績を残すべきである。そこに何の心残りがあるか。かくてこそ金石の質にあらずして、その光は日月をあはせ、草木の實にあらずして、その壽は松柏を凌ぐといふものである。

それから、昔ながらの尊聖堂、馬屋、癸堂の遺法を傳へた貯穀の倉、木戸公撰文の清風松碑、また山縣公撰文の清風翁記念碑などに接し、小丘を繞つて、疎らに残つた榎、棕櫚、櫻樹などを目にしては、その一一が、清風多年の富國諸政策の片鱗であり、記念樹であつて、そゞろに懐しさに堪へぬものがある。

もしそれ最後に、誓を決して、碧波浩蕩の中、海上アルプス、青海島山が、クツキリと一線を劃する日本海の彼方を注視せんか

西海の底に聲あり夜の雪。

と吟じて、海防の急を唱へ、一世に大警戒を興へた大人物の聲が今もなほ聞える氣がする。おゝさうだ。西海の底、東海の

あなた、更に遠く、海の彼方に當つて聞えるものは濤の音か。風の音か。將た又雪の聲か。愛國の青年よ、心耳を傾けてこれを聴け。

そして永く、この偉人の精神を學ばねばならぬ。(完)

○村田清風略年譜

(福江氏寄)

天明三	四月二十六日大津郡三隅村に生る	一	九	當役當職兩署仕組掛となる(是より忠正公)	五六
文化五	齊房公の近侍となる	二七	十一	天保の改革を發表す	五八
十四	鎌倉に廣元季光二公の墓を發見す	三六	十四	羽賀臺閩兵	六一
文政六	鎌倉に使し二公の墓を建つ	四二	三	辭職郷里に歸り尊聖堂を興す	六三
七	當職手元役となる	四三	元	明倫再興用係となる	六六
十	矢倉方となる	四六	二	此歳忠正公尊聖堂の開創を賞し銀五枚を賜ふ	七三
天保元	撫育方となる	四八	二	隱居にて表番頭格次座五月二十六日逝去	
二	當役用談役となる	四九	十六	明治天皇金壹千圓追賜	
三	議合はすして辭職す	五〇	二十四	四月八日正四位を贈らる	
四	手元役となる	五一			
七	齊熙の喪に中りて辭職す	五四			

昭和八年三月二十五日印刷  
昭和八年四月一日發行

村田清風奥附

定價五拾錢

版權  
所有

編輯者

山口縣教育會

右代表者

山口市大字後河原第一七四番地ノ一 齋 藤 彦 一

印刷者

山口市大字道場門前一一〇ノ一〇 平 佐 國 介

印刷所

山口市大字道場門前一一〇ノ一〇 大同印刷會

山口市大字後河原

發行所

山口縣教育會

振替貯金欄岡一八一八番

外2459  
37

# 刊 行 豫 告

山口縣教育會編輯

## 吉田松陰全集

### 豫定

- ◆ 菊版美本總クローズ金文字入
- ◆ 一冊約六百頁内外
- ◆ 一部(五冊乃至六冊)貳拾餘圓の見込

豫定部數以外は印刷せず

購讀申込は

山口市後河原教育會館内

山口縣教育會

振替福面一八一八番  
電話山口三八三番

監修 「吉田松陰」著者 徳富蘇峰氏  
 監修 東京帝國大學教授 渡邊世祐氏  
 編輯 廣島高等師範學校教授 玖村敏雄氏  
 編輯 「吉田松陰の研究」著者 廣瀬 豊氏  
 編輯 海軍 大佐 佐 廣瀬 豊氏  
 編輯 元山口縣立萩中學校教諭安藤紀一氏

### 内 容

- 一、著述 篇
- 二、抄 錄 篇
- 三、詩 文 篇
- 四、書 簡 篇
- 五、日 記 篇
- 六、關係文書篇

明治維新の先驅者吉田松陰の偉績は茲に改めて縷説を要せず、特に其人格の崇高、至誠報效の精神の熾烈なる、後進者の龜鑑として仰ぐべく、又大教育家として、學ぶべき點決して少しとせず。

松陰は今より七十餘年前三十歳の壯齡を以て國事に殉ずる所となりしが生前の著書類る多く既刊のものも今や絶版となり、之を獲ること殆んど不可能の状態にあり、又門外不出の未刊遺文書も少からず、是等の資料を蒐集整理して之を後昆に傳ふるは吾人の義務たるのみならず、國民精神涵養上極めて喫緊のこゝたるを信じ茲に本會は「吉田松陰全集」を發行して世の需要に應じ、以て松陰の眞精神を普く後世に傳へんことを期す。

本計畫は今後二ヶ年内に完成の豫定なり茲に本會計畫の一端を披瀝して、廣く世の松陰研究者に豫告する所以なり。



789  
Mu59

終

